



黒山田の鬼火焚き



鬼火焚きの火付け
(戸矢)



準備が完了した鬼火
焚きのセット (戸矢)

鬼火焚き

毎年きまって行なわれることを年中行事といいます。単調な生活の中で変化をつけることで、より楽しい人生をおくる手段が年中行事の1つの意味だと思えます。

冬の年中行事の1つに「鬼火焚き」があります。今年も戸矢・大野地区などで1月6日の夜に行なわれました。

青竹などの竹小積みを畑や川の側に作ります。この竹切りは以前は子供たちが冬休みに入るとすぐ準備にかかっていたそうです。暗やみの中で竹に火がつけられると、青竹がポンポンと音をたてて威勢よくはじけ、この音で鬼が逃げ出し、無病息災を祈ります。

この火で正月の注連縄(しめなわ)や去年のお守りなどを焼いたり、餅を焼いたりして食べます。

南山地区ではこの灰を持って帰ると蛇になるなどの言い伝えも残っています。

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.9

四山の風物

下南山の 子供七福神



「七福神の入りー、七福神の入りー」という声と共に、寒さをつけて今年も下南山地区の各家を七福神が訪れました。

今年の宰領（さいりょう）は中学3年生の坂本智弘君で、坂本家が営所（えいしょ）となり、前日（1月5日）に衣装揃えを行ない、当日6日の午後、子供たちが集まってきました。

宰領と七人の神様（大黒天・恵比須・毘沙門天・弁財天・布袋・福祿寿・寿老人）の顔を墨で作り上げていくのは、長年にわたり館林貞夫さん（82歳）の担当です。子供たちは館林さんの前で神妙な面持ちで座り、1人ずつ神様が出来上がっていきます。

夕方から各家を回り始めますが、最後の家を訪れるころはもう深夜となります。

有田と馬

今年は午年（うまどし）。有田と馬（うま）について少しふれてみたいと思います。

有田では窯に初めて火を入れる時、左馬（ひだりうま）といって、馬の字を反対に書いたものや左向きの馬の絵をかいた製品を焼く風習があります。窯焚きとして長年有田の登り窯を見てきた泉山の北川勝馬さん（80歳）も左馬の製品を焼いた覚えはあるそうですが、そのいわれはよくわからないということです。また、外尾山の窯元、藤本覚司さんによれば、「初窯はそうたびたびあるものでなく、その窯で焼く製品は貴重なものだった。そこで左馬の文字を書いた製品を焼き、近所のお年寄りに中風にならないよう、無病息災を祈って配った」そうです。

この行事の起源ははっきりしません。役の名称や唱え言葉などは口伝えの中で少しずつ変化してきているようです。昭和13年に出された「曲川村郷土誌」の記録と比較してみると、宰領は「鬼豆振り」という名で、豆ではなく白米をまいていたそうです。ほかの神様はほとんど変わりません。唱え言葉は次のとおりです。

- ・大黒天～大黒天の金銀をどてんどっさり打っ奉る
- ・恵比須～恵比須三郎左衛門殿、金の釣竿五色の糸で大きな鯛を釣り込んだ、釣り込んだ
- ・毘沙門天～毘沙門天の隅から隅まで悪魔を払う
- ・弁財天～それもそうでござんすわいな
- ・布袋～福は内に入れ、内に入れー
- ・寿老人～そうとも、そうとも
- ・福祿寿～ごもつとも、ごもつとも
- ・宰領～君の恵みぞー
- ・全員で～ありがたき、ありき君の恵みぞありがたき

これを2度繰り返します。さて今年はどうな福が舞い込んできたのでしょうか。

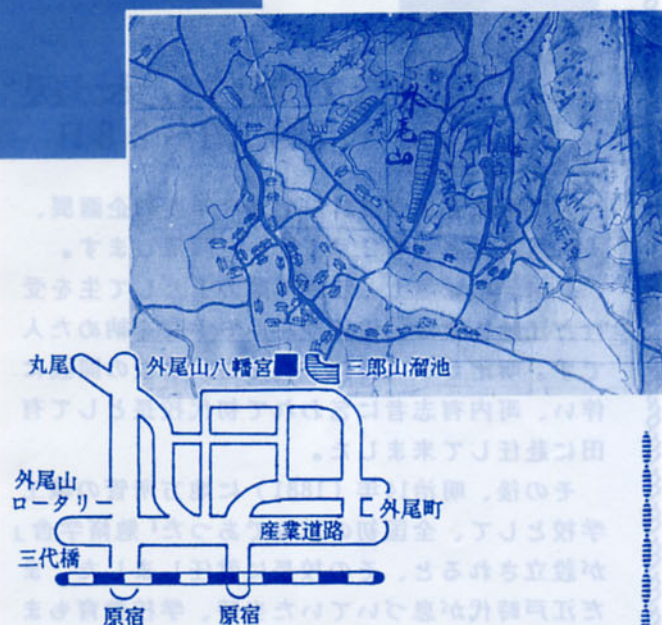
このほか、馬は左には倒れないので、その窯が倒れることがないようにとか、炎が上へのびていくことを“馬が走る”といい、窯の中の火がよく回るようにと、窯の成功を祈願してのいわれなどが考えられています。

同じ窯業地の瀬戸でも左馬の風習が伝わっているようですが、文字ではなく絵が多いそうです。最近初めて火を入れた窯では、すべての製品に左馬の絵をかいて焼いたそうです。瀬戸では初窯は神聖なもので、神社に奉納する絵馬のような意味合いで左馬の風習を伝えているようです。

ともあれ、その昔、火は生きもので窯の焼成如何で、それまでの工程がモノになるかならないかという重要な仕事でした。今のように機械化されていない時代、窯の成功を何かに祈願した名残りの1つといえます。

街角の歴史 Part 1

寄稿 外尾山八幡神社由来



◀安政6年(1854)の外尾山(「松浦郡有田郷図」より)



▶八幡神社御神体

安置し、当時の宮司川浪幸一氏によって入魂されました。昭和12年12月12日深夜、外尾山区民一同の奉迎を受け御神殿に奉戴されたものです。御尊像は写真のように雲上人か公家の姿をされています。境内には樹齢300年を越す松の大木が10数本も繁茂した崇厳な神域でありましたが、昭和10年代に松食い虫に侵かされ全滅してしまいました。切り倒された松の根まで採取され、戦時中松根油の材料として使用されたものです。

八幡神社は外尾山のほぼ中央の北方に位置し、150の石段を登った丘の上にあります。その建立年代は不詳ですが大串郡右衛門、同覚右衛門の奉獻になる大鳥居には「寛永四年(1627)二月吉辰山中昌之作」と刻んであります。この大鳥居の建立年代から推定すればおよそ御神殿の建立年代も想定することが出来ます。

すでに神殿は老朽化し雨漏りなどのため改築の時期に達していますが、拝殿の天井には十二支えとの絵を中心に全面に亘り山水花鳥動物などが描かれています。明治の末期、当時地元の陶工たちによって描かれたものです。雨漏りなどによってこのまゝ朽ち果てるには実に惜しい建造物であり、何とか保存出来ればと惜しまれてなりません。

境内には鏡の形をかたどった太神宮の石碑があり「安永乙朱四(1775)年八月吉祥日当山中」と刻んであります。そのほか庚申社の石碑や、不動明王像が建立されています。また神殿の東側の一段下がった所に大師堂が建立され、有田光明新四国札所となっています。

八幡神社は戦さの神として、また安産の神とも仰がれました。御神体は数百年を経て朽ち果てその原形を留めず、昭和12年当時の区長青木栄一氏が京都の製作所に御神体の製作を発注しました。完成後有田村々社の椎谷神社に10日間

初代 新村 村長 松村定次

ここで特に記したい事は、境内のほぼ中央に巨大な記念碑が建立されてある事です。高さ2メートル以上もある自然石の碑には「松村君之碑」と刻んでありますが、その松村君という人は幼名を甚九郎といい、後に定次と改名し外尾山登窯で窯焼きをしていた9人の中の1人です。

後年明治22年町村制の制定に伴い、初代新村(後に有田村となる)村長に就任し、以来38年まで16カ年の長きに亘り村政に貢献された名村長でした。氏の功績を称える碑文は正二位大勲位侯爵大隈重信公による題額で合せて従三位勲一等武富時敏撰の詩が刻んであり、その書は於保謙孜書と記されており、大正8年4月3日に建立されたものです。

執筆者のプロフィール



青木安治(あおき・やすじ)氏

明治43年、外尾山生まれ。有田工業学校製陶科卒業。有田町役場を昭和42年に退職後、民生委員・人権擁護委員などを歴任。

街角の歴史 Part 2



陶器祈願所

法元寺



窯焼きにとって窯出しは喜びにも増して、その不安は大きなものでした。そして、3度その不安が現実となればその窯焼きはつぶれるとも言われていました。

古い登り窯の近くには、稲荷神社の祠や「山の神(地神)」が祭られているのをよく見かけます。窯焼きは火入れの日を選び、これらの神に供物を捧げて焼き上がりの無事を祈りました。そして、陶器祈願所であった法元寺の祈禱札を竹の先に挟んで窯場に立てました。

今、赤絵町にある法元寺の門前には「陶器祈願所」と陰刻された石碑があります。法元寺が所蔵する古文書には、元治元年(1736)に佐賀藩より「山中繁昌・諸災転除」の勤行を命ぜられ、陶器祈願所となったことが記されています。法元寺には藩から毎月銀1枚を焼き物産業の繁栄の祈禱料として寄進されていました。安永6年(1777)藩からの寄進が取り止められることになった時に、法元寺がその継続を願い出て、その結果、1年に銀1枚の寄進になったということです。

陶石というただの石を魔術とも思える見えざる手で美しい焼き物に変えてしまう炎は、人間のささいなミスも見逃しません。それこそ神の審判を仰ぐような気持ちで窯出しの瞬間に息をのんだことでしょう。思えばこの有田は400年近くもの長い間、その張りつめた瞬間を絶えず繰り返してきたということです。

企画展のお知らせ



江越礼太展
2月1日～28日

有田町歴史民俗資料館では今年度の企画展、「江越礼太展」を2月1日から開催します。

幕末、小城藩士・江越道順の子として生を受けた江越礼太は、佐賀や江戸で学問を納めた人です。明治5年(1872)有田白川学校の開設に伴い、町内有志者に乞われて初代校長として有田に赴任して来ました。

その後、明治14年(1881)に地方所管の職工学校として、全国初の試みであった「勉脩学舎」が設立されると、その校長に就任しました。まだ江戸時代が息づいていた当時、学校教育もままならぬ時代にいち早く実業教育に目を向けた江越礼太の遺品を中心に、彼の業績と人間像にスポットをあててみました。

▲期間 2月1日(木)～2月28日(水)

▲場所 泉山 有田町歴史民俗資料館

▲展示品
・江越礼太のブロンズ像
・愛用の酒器
・掛軸
・屏風
・白川学校、勉脩学舎関係資料等

▲入館料 大人 100円 大学高校生50円
小中学生30円

濃み筆のつぶやき

今年は年の始めから皿山の年中行事を追ってみました。七福神では子供たちが主役ですが、子供のころ、この祭りをした大人の人たちも、準備やその世話に追われながら、楽しそうに昔の話をしてくださいました。年々途絶えていく年中行事が多い中で、土地にしっかりと根付いていることは力強い限りです。(葉)

有田町歴史民俗資料館報

発行年月日 * 平成2年2月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955-43-2678